

# 行基架橋考

松村 博<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員

E-mail: hmatsumura@leto.eonet.ne.jp

奈良時代に活躍した僧行基は民衆への布教活動と同時にインフラ整備に力を注いだ。その行為は宗教的な活動である利他行であり、農地開発や交通の円滑化を望む多くの民衆の要望にも応えるものであった。本考では建設された土木施設のうち、橋と道に焦点を当てて考察した。行基が主導して架けたとされる橋の位置やその意味を検証すると、行基が目指していた理想郷の概要や当時の交通網が浮かび上がってくる。特に、行基が架けた6橋のうち、その位置が必ずしも明確でない摂津の4橋について考察し、その意義を検証した。

*Key Words: Priest Gyōki, Altruistic Conduct, Construction of Bridges, Nara era*

## 1. 行基による道、橋の整備

### (1) 利他行としての土木事業

奈良時代、民間への伝道僧行基が信者を率いて各地で様々な土木事業を行っている。要害の地を巡り、橋を架け、堤防を築いた。それを聞いた人々は皆やって来て協力したという。行基は天智朝の668年、河内国大鳥郡（のち和泉国、現在の堺市西区）の生まれ、父は高志才智で、百済王子の後裔と伝えられる。14才で出家し、20数年間の山林修行ののち、巷に下り、民衆への布教を行うようになった。

行基の宗教活動は仏教修行の場である寺院（道場）の建設はもちろんであるが、民衆が必要とする土木施設の築造も重要な要素となっていた。その施設は、治水、利水、交通施設などの多岐にわたった。そしてその活動範囲は出身地の和泉をはじめ、大和、河内、山城、そして摂津に及んでいる。

行基に関する史料はそれほど多くは残されていないが、『行基年譜』とそこに引かれた「天平十三年記」及び『続日本紀』などを参考に考察する。

### (2) 架橋六所

奈良時代、基本的に平城京が都であった時代は、なお律令制の徹底が図られ、全国支配のために地方との街道建設や主として畿内での行幸路の整備が時の政権によって行われたはずであるが、『続日本紀』の記述などからは具体的な道や橋の実態は必ずしも明確にできない。一方、民衆への仏教伝道を行っていた僧侶が道や橋の整備を行った記録が残されており、具体的な橋名などがわかるも

のがある。具体的な道橋の名前や位置はそのような記録を基軸にして、のちの時代の記事や現代のように地形の改変が進んでいなかった明治期の地図などを参考にしながら推定した。

施設の具体的な位置や名前がわかる記録としては行基の活動の記録が最も多くの情報を提供してくれる。行基が主導して行った公共的事業は、『行基年譜』に採用された「天平十三年記」に一括して挙げられており、その内訳は池（15）、溝（6）、樋（3）、堀川（4）、そして橋（6）、道（1）、船息（2）、布施屋（9）となっている。

このうち池、溝及び池溝、樋は灌漑施設、堀川は基本的には悪水抜き排水施設と考えられ、これらに関しては、尾田栄章氏の詳しい論考<sup>9)</sup>がある。

本考では橋、道の陸上交通施設について考察するが、布施屋も重要な交通施設の一つと考え、対象とする。

橋は具体的に、以下の6橋が挙げられている<sup>1)</sup>。

宗（架カ）橋六所

泉大橋 在<sub>下</sub>相楽郡泉里<sub>上</sub>

山崎橋 在<sub>下</sub>乙訓郡山崎郷<sub>上</sub>、

神亀二ノ九月十二日始起、

已上二所山城国<sup>平</sup><sub>云</sub>

高瀬大橋 在<sub>下</sub>嶋下郡高瀬里<sub>上</sub>

長柄

中河

堀江 並三所西城郡

已上四所<sub>在</sub>攝津國<sub>上</sub>

道路に関しては、下の記述がある。

直道一所、在<sub>下</sub>自<sub>上</sub>高瀬<sub>上</sub>生馬大山登道<sub>上</sub>、

已上河内國茨田郡攝津國<sup>平</sup><sub>云</sub>

### (3) 山崎橋と泉大橋 (図-1 参照)

『行基年譜』の記述から山城国において、まず神亀2年(725)に山崎橋を架け、その後、天平12年(740)に泉大橋を架けたと考えられている。架橋は寺院(道場)の建立や布施屋の開設などと密接な関係をもつ宗教活動の一環であったと考えられる。泉大橋は泉橋院及び隆福尼院と同時に建てられたと推測されるし、山崎橋でも久修園院、山崎院(山崎院)の設立との関連が指摘できる。そしてこれらの寺院が橋の建設の基地になり、維持管理の役割を担っていた可能性がある。

山崎橋は道昭が渡した橋が朽ち果てた柱だけになっているのを見た行基が発起して再建したと伝えられる。『行基年譜』には五八才のときのこととして、楠葉で久修園院を建て、山崎川に橋を架けたとある。「弟子を率いて修行を続けながら山崎川(淀川)まで来たとき、河の中にある大きな柱を見て人に問うたところ、これは船の大徳(道昭)が渡した橋の柱であるとのことであった。そこで行基は発願して山崎橋を架け始めた」という。自らの師の遺志を継ぐ決意を固めた事業であったに違いない。



写真-1 現在の久修園院



写真-2 泉橋寺(泉橋院と同所カ)



写真-3 現在の泉大橋(昭和26年完成)

橋の位置は淀川の三川合流地点のすぐ下流で、現在も京都府八幡市に橋本という地名が残る。この地は奈良から木津川左岸を北上する道が山陰、山陽方面へ向かう街道に直結している所で、橋の必要性が高かった。

日本の仏教は導入当初から国家仏教の形をとっていたため、民衆への布教を行う行基等の宗教活動は国家にとって好ましいものではなかった。

養老元年(717)には行基と弟子たちは「街衢に集まって妄りに罪福を説き、家々を訪れて余物を乞い、聖道と称して百姓を妖惑する」ことなどが僧尼令に違反する行為として弾圧されることになった。しかし天平3年(731)ころには政府の行基に対する評価は大きく変化し、そののち、行基の教団は恭仁京に関連する橋の建設などにも積極的に参加するようになっていった。

天平13年(741)に行基が木津川に大橋を架け、同時に狛の里に伽藍を建てて僧院とし、泉橋院と名付けたとされる(『行基大菩薩行状記』)。また『行基年譜』の記述からは天平12年の架設とも推定されている。この場所は大和と山背を結び、東山道や北陸道へ通じる重要拠点であった。泉大橋の架橋事業は行基の教義に従う人々の宗教心の発露であったことは間違いないが、その時期からして恭仁京の建設と無関係ではあったとは考えにくい。

## 2. 摂津での架橋と道路整備

### (1) 高瀬大橋と直道 (図-2 参照)

高瀬大橋の位置に関しては、高瀬橋院、尼院(天平2年起工)の名称やかつて淀川の右岸にあった橋寺村(現在も淀川左岸に地名を残している)などから和田萃氏は現在の豊里大橋のすぐ東にその位置に想定している<sup>18)</sup>。そして高瀬から生馬大山への直線道の復元を試みている。しかしこの道を和田氏が想定した逗子越えへ達する直線的な道とするには無理があるように思われる。当時は図-2に示したように河内湖の名残の水面(草香江)が広く残っていたと考えられており、直線的な道を築造するのは難しかったと考えられる。

現在の守口市高瀬には高瀬神社があり、付近には高瀬寺にまつわる地名や伝承が残されている。高瀬橋院と尼院は『行基年譜』では嶋下郡穂積村に在るとされているが、『吹田市史第1巻』ではこの地が「茨木市穂積付近に所在したのではなく、高瀬里が島下郡穂積郷の所管であったことを意味するもの」と推論されている。

高瀬大橋の推定位置から生駒山地へ東進する直道を推定すると清滝越えあたりに達する。これは生馬大山の登道に直結しておらず、想定に無理があるかもしれないが、橋の推定位置としては妥当であろう。ただし、生駒山地の東裾を南進するのちの東高野街道を利用すれば、逗子越えの道や暗峠の道にも容易に接近できたであろう。

### (2) 長柄、中河、堀江の橋

長柄、中河、堀江の橋の比定は難しい。堀江は、『仁徳紀』十一年条にある「堀江」から後の大川(淀川本流)である可能性が指摘できる。また、『行基年譜』天平5年(733)にも堀江橋が見える。

中河は中ッ河と読み、後の中津川とすると長柄の想定位置と重なることになる。そこで、少し無理があることを承知で、長柄の橋柱（人柱）の伝承が伝えられる場所から神崎川の橋と想定した（註1）。こう想定して3つの渡河点を結び難波から吹田へ通じる道路が想起され、古代の難波からの交通路も見えてくることになる。その推定線を図-2に示した。

堀江の橋は現在の天満橋と天神橋の間あたりの上町台地北端から天満へ通じる位置で、想定に大きな無理はないはずである。中河の橋は淀川からの分流点からすぐ下流の中津川、後に長柄と呼ばれるようになった場所が妥当であろう。

長柄の橋は、のちの高浜橋の架設地点近傍を想定した。この地点は和田氏が想定した高瀬大橋から西北行する道が神崎川を渡る位置に合致し、西へ行くと垂水を経て、現在の伊丹、さらに昆陽で西国街道に合流する道につながる。また現在の吹田の中心部を経て北上し、西国街道に連結するのちの高槻街道が想定できる。

この頃の難波から山城方面へのルートとしてはのちの京街道のように大和川の淀川合流点際を渡って淀川左岸を北東方面へ向かう道路は河内湖の名残の湿地帯を通過しなければならず、安定した道を確保することは難しかったと考えられ、比較的安定した北上するルートが選ばれたものと考えられる。

神崎川左岸の現在の大阪市東淀川区井高野、江口、大道にかけては吹田砂州が堆積しているため、旧橋寺村あたりでは淀川が大きく南へ迂回していた<sup>3)</sup>。高瀬大橋はその東端部に架けられたと考えるのが合理的であろう。それは橋から現在の吹田中心部方面へ向かう比較的安定した道路を確保することができたことになる。さらに淀川右岸の自然堤防上も利用できたはずである。

### 3. 行基の摂津での活動

#### (1) 聖武朝への協力

行基が摂津で建設したとされる4橋は、聖武朝の後期難波宮の整備の一環であったとみることも可能である。聖武朝難波宮は神亀3年(726)10月、従三位藤原宇合を知造難波宮事に任命して、造営が始められた。そして天平6年(734)には官位に応じて難波京の宅地が分け与えられており、ほぼ完成をみたと考えられる。

天平2年(730)は行基の活動にとって画期的な年であった。寺院（道場）の建設はかなりの場合、公共施設の建設と連動していたと考えられ、摂津国での活動は、吉川真司氏が指摘するように、「おそらく行基の主な意図は、聖武天皇による難波京建設を支援することにあつた」<sup>17)</sup>と考えられる。行基は大化2年からの4年間に22寺を建てたとされている。行基が建立したとされる49寺の半数近くが集中しており、重要な社会事業をとまっていたと考えられる寺も多い。

『続日本紀』天平3年(731)8月の詔には、「行基法師と行動を共にする優婆塞、優婆夷らの法に従って修行するものの、男は61歳以上、女は55歳以上のものの入道を許す」とされ、この時から行基集団の活動は公認された

ことになるが、それ以前から教団公認の動きはあったのであろう。行基は前年より活動を活発化させている。これらの事業は摂津での道路整備や池、溝の建設を基本にした農地の開発であった。

天平16年(744)になって恭仁京にあった高御座などを難波宮に移し、ようやく正式の都としている。その一方で、聖武天皇は天平14年(742)には恭仁京から近江甲賀郡への道の建設を命じ、離宮（紫香樂宮）を造らせ、何度も行幸している。そして、恭仁宮、難波宮、紫香樂宮、平城京への移動を繰り返している意図がどこにあったのかはよくわからないが、政治的不安が背景にあったことは間違いのないであろう。

天平16年(744)2月には突然、難波から紫香樂宮に行幸している。

取<sub>二</sub>三嶋路<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>幸紫香樂宮<sub>一</sub>

（『続日本紀』天平16年2月24日）

とあり、この時通つたとされている「三嶋路」について、足利氏は『三代実録』元慶5年(881)正月の記事に伊勢齋王であった識子内親王が三嶋道を取って河陽宮に向かったとあることから山陽道、のちの西国街道に当たるとしている<sup>2)</sup>。

『吹田市史第1巻』では「長柄、中河、堀江の三つの橋は、いずれも難波京より北へ向かう「三嶋路」に沿って設けられたと解される」、天平16年には「行基の造つた三つの橋は健在であったかもしれない」としているが、この解説には妥当性があると思われる。ただ、難波を出て北上し、山陽道を経て、河陽宮の近傍、つまり山崎橋を渡って紫香樂宮に行くのは随分遠回りになる。それより堀江、中河の橋を渡って、当時健在であったとすれば、高瀬大橋を渡って東行するのが適切なルートであると考えられる。さらに、清滝越えから木津へ向かい、恭仁宮から紫香樂宮と向かったとする推測も成り立つ。

#### (2) 布施屋の役割

行基による道橋の整備において重要な役割を果たしたのが布施屋であったと考えられる。「天平十三年記」には9か所の布施屋が上げられており、いずれも街道の要所や渡しなどの交通の結節点に位置する。旅行者の救済や休息に当てる施設であった。このうち、上記の交通路に関連が深いと考えられるものには以下のようなものがある（図-1、2参照）。

泉寺布施屋 在<sub>二</sub>相楽郡高麗里<sub>一</sub> 山城国

岷陽布施屋 在<sub>二</sub>河邊郡岷陽里<sub>一</sub>

垂氷布施屋 在<sub>二</sub>豊嶋郡垂氷里<sub>一</sub>

度布施屋 在<sub>二</sub>西城津守里<sub>一</sub> 已上三所在<sub>二</sub>攝津國<sub>一</sub>

楠葉布施屋 在<sub>二</sub>交野郡楠葉里<sub>一</sub> 河内国

岷陽は現在の昆陽寺付近の地を指し、山陽道、のちの西国街道に面する所で、行基はこの近傍で岷陽上池などを築造、灌漑施設を造り、嶋（岷カ）陽施院（『行基年譜』天平3年）という寺院を建てた。「施」に他の寺院にない意味が込められていたかもしれない。

さらに、行基は天平13年(741)3月、行幸してきた聖武天皇と山城国泉橋院で面会して、「給孤独園<sup>ぎつこどくおん</sup>を為奈野<sup>いな</sup>に開設することを願い出て許された（『行基年譜』天平13

年)。「給孤独園」は祇園精舎のことで、僧院を意味するが、貧困の孤独者を救済する施設であったと考えられている。そして為奈野は現在の尼崎市猪名寺のあたりとされる。『日本後記』弘仁3年条にある憐独田は、行基が身寄りのない窮民を救済するために開いた田地であるとされ、給孤独園を運営するための経済的基礎を確立するた

めの農地を開発する意図を持っており、昆陽上池などの造営もそれらに結び付く事業であったことを想定すると、行基の事業は宗教活動と社会事業を総合的に行うことを目指していたと考えられる。岷陽布施屋はその一環をなす施設であると推測することが許されるであろう。

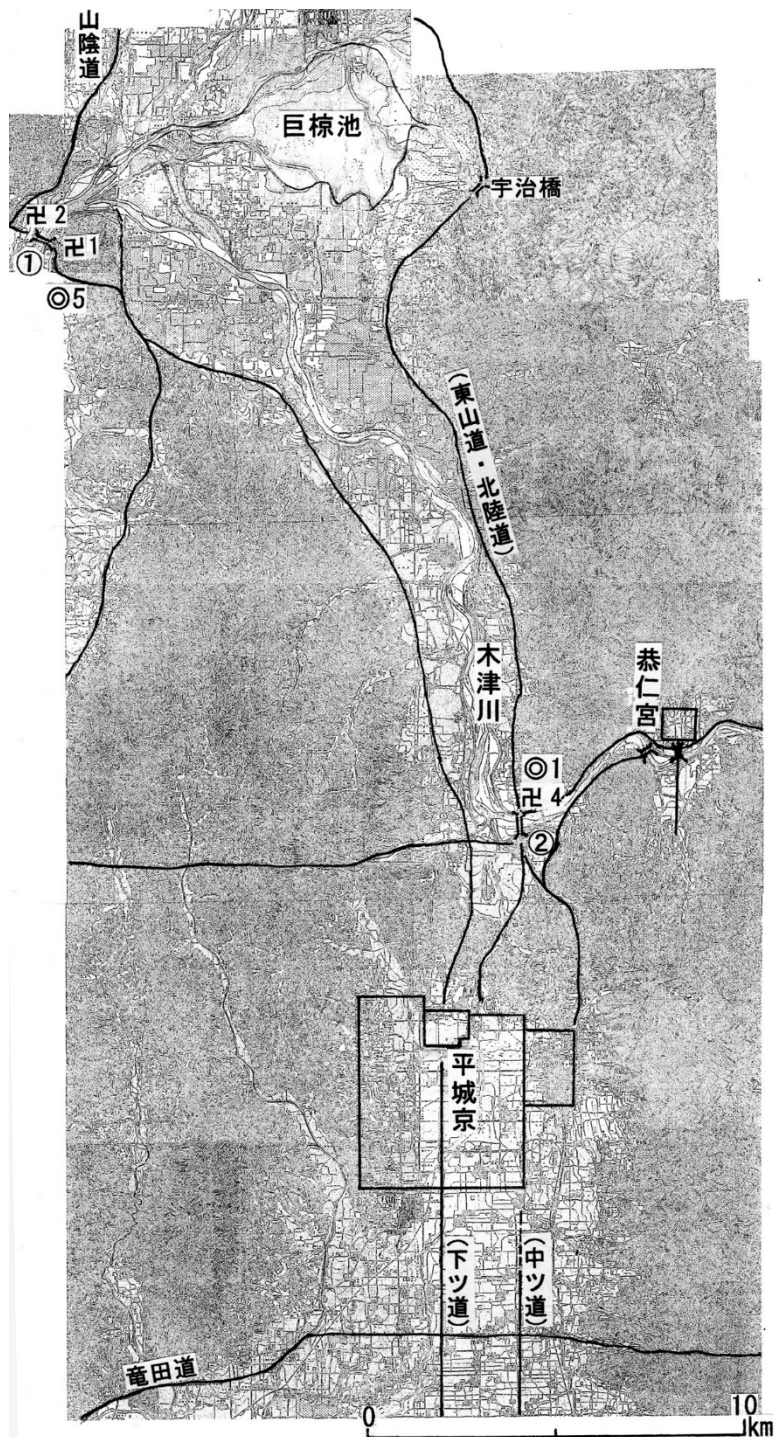


図-1 行基による架橋 (山城)

(道路は概略推定線を示す。地図は明治20年以降の仮製地形図を用いた)

橋、寺院(道場)、布施屋の記号は図-1、2 共通

橋—①：山崎橋、②：泉大橋、③：高瀬大橋、④：長柄の橋、⑤：中河の橋、⑥堀江の橋  
 寺院(道場)—卍1：久修園院、卍2：山崎院、卍3：高瀬橋院、尼院、卍4：泉橋院、隆福尼院  
 布施屋—◎1：泉寺布施屋、◎2：岷陽布施屋、◎3：垂水布施屋、◎4：度布施屋、◎5 楠葉布施屋



図-2 行基による架橋(摂津)(草香江は文献5)、59P、図10を参考にした。)

このように行基は、時の政権、特に聖武天皇の承認を得て、昆陽地方の自然条件を克服しながら、地域の豪族や農民の協力を得て良田を生み出し、それを財源にして修行の場としての寺院(道場)を開設した。その寺院に加えて、少年や老人の孤独者を救済する施設でもあるばかりでなく、困窮した旅行者を救う布施屋、身寄りのない窮民を収容する給孤独園なども建設して、昆陽周辺に自らの理想郷を実現しようとしたように見える。

垂氷は現在の吹田市垂氷の地、式内社の垂氷神社に近接する所と考えられ、大阪から北上した道が分岐して茨木、高槻方面へ向かう道と伊丹方面へ向かう道の分岐点にあたっている。垂氷は清泉の沸く地として有名で、旅

行者に癒しを与える施設を設ける場所としては最適であった。

西城津守里は西成郡と考えられ、度布施屋の位置はよくわからないが、度は「渡り」の意味であろう。上町台地北端部に位置し、堀江の橋の近傍に設置されたと推測した。これらを地図上に落とし込んでみると、行基が企図した交通路の全体像が見えてくるように思える。もちろんこれらの道や橋は、時の政府が建設し、管理している幹線道路を補完するものであるが、きめ細かい交通の利便を提供するものであるとともに自らの宗教活動に資するものであった言えそうである。

井上薫氏は、布施屋の役割を「運脚夫と役民の困苦を救うための施設」<sup>4)</sup>であったとしている。律令制のもと

では租庸調の米、絹、布をはじめ、多くの物資が都へ運ばれていたが、各地からの運搬は公民の義務で、その他、平城京などの造営のための労役に徴発された人々に対する旅費などはほとんど支給されることはなく、特に帰郷する際には旅費がなく、野垂れ死するものも多かったとされている。このような困窮した旅行者に食事や宿泊を提供する施設であったと考えられている。

行基は運脚夫などの救済施設にとどまらず、貧民救済の地域的拠点を目指していた可能性はあるだろう。

#### 4. 難波から北進する道路

##### (1) 垂水からの交通路

難波から北上した道路では、垂水が結節点の役割を果たしたと考えられる。垂水からの道路は吹田丘陵の裾を巻くように設定されたと想定される。古い時代の道路は丘陵の傾斜変換線に沿って形成されたものが多く見受けられる。これらは山の辺の道と言えるものであるが、吹田丘陵の東側では、のちの高槻街道が通じており、垂水から南裾を通る吹田街道を西進すると猪名寺付近に達し、のちの伊丹街道に通じており、伊丹からほぼ西進（のちの西宮道）すると、西国街道に合流して、昆陽に達する。この他にも伊丹へ向かうルートは考えられるが、行基は猪名野を通るルートを選択したのであろう。

いずれにしてもこのあたりの嶋下郡、豊島郡、川辺郡は古代の条理遺構がよく残っている地域で、地形的にも西進する道路の設定はそれほど難しいものではなかったと考えられる。

##### (2) 北進する道の検討

難波から北行するルートとして、いわゆる「三嶋路」のルートと接続する道路などを検討したが、他にもいくつかの可能性があり、具体的な提案もなされている。

足利健亮氏は『日本書紀』舒明天皇3年(631)と同10年(638)に舒明天皇が「有馬の温湯」に行幸した記事があること、さらに大化3年(647)孝徳天皇と有間皇子が「有馬の温湯」に行幸したとされ、「左右大臣、群卿大夫従えり」と、かなりの人数で行幸したことに注目して、この行幸路を推定している。足利氏はこの行幸路を難波京の西二条大路を北上する道路と設定し、推定長柄橋を渡ったあたりから北西に直進する道路を想定、昆陽寺を通過してさらに北西行する道路を提案している<sup>2)</sup>。

難波から北西方面を結ぶ道路にのちの中国街道がある。この街道を具体的に示す記事として、『太平記』巻36に当時の南北朝軍の戦闘を記したものがある。正平16年(康安元年(1361))、楠木正成、正行亡き後、南朝軍の一部を率いていた楠木正儀と和田正武は北朝方の内部対立をついて500余騎をもって、渡辺の橋を渡って天神ノ森に陣を取った。摂津守護職となった佐々木道誉の嫡孫秀詮は千余騎をもって、神崎の橋を隔てて防戦しようとした。ところが守護代が橋を渡って打って出たところ、楠木軍は待ち伏せ攻撃を仕掛けた。そして道の両側が馬の脚も立たない深田であったために佐々木軍は身動きが取れず混乱し、一部が中津河の橋爪まで追い詰められて打

ち取られた。秀詮は神崎の橋の近くに退却してきたが、味方によって一間が引き落とされていたため渡ることができず、戦死した。

その翌年にも神崎の橋を挟んで和田、楠木軍と守護職佐々木軍との合戦があった(『太平記』巻38)。この時の守護代は神崎の橋を2、3間焼き落として、敵を待ち受けていた。楠木軍は橋詰を動かさないと見せかけ、上流の三國の渡より対岸に渡り、小屋野、富松などへ軍勢を差し回して神崎の橋の北方面から攻撃を仕掛けた。不意を突かれた佐々木軍は混乱に落ち入り、東、西へと落ち延びた。勢いの乗った楠木軍は湊川まで押し寄せた。

『太平記』の記述をすべて史実とすることはできないが、合戦の舞台となった中国街道は14世紀にはほぼ確実に存在し、軍隊の移動にも使われていたこと、そして神崎川の渡河点として三國の渡もあったこと、これにより大阪中心部から北へ向かうのちの能勢街道も整備されており、ここから迂回すれば、昆陽、富松に達することができ、のちの伊丹街道を通れば、神崎の橋の西岸に達することができたことなどがわかる。そして湊川まで進出できたのは尼崎から神戸方面への道も整備されていたことになる<sup>12)</sup>。

しかし、神崎の橋に通ずる道は深田(湿田)の中を通っており、騎馬の移動が難しい状況が描写されており、中国街道の前身となる道が幹線道路の役割を担えたかどうかは疑問である。

この中国街道の前身となる道がいつの時代から確実に存在したかを示す歴史上の確証を筆者は得ていない。この地の存在が書物に記されたのは12世紀初に書かれたと考えられている大江匡房の『遊女記』で、そのころの神崎、蟹島は「天下第一之楽地」で、江口と同様の賑わいであったという。

神崎川沿岸は長岡京遷都にもなつて淀川と三國川(神崎川)を連絡する運河の開削が行われ、以降平安時代を通じて淀川水系の運輸は神崎川が中心となったようで、沿岸地が繁栄した。

以上から、のちの中国街道に当たる道を図-2に示したが、仮に8世紀後半には天満砂州がもう少し西に形成されていたとしても道としては不安定なもので、街道として確立するのは10世紀以降になったと推測した。

#### 4. 難波宮と平城京を結ぶ道

8世紀には平城京から難波宮をはじめ、河内6寺などへの行幸路として竜田越えの道が整備されたと考えられる。この道は竜田大社あたりから西側の安堂あたりへ至る峠道であるが、一部が亀の瀬の地滑り地帯を通ることになっていたため「懼坂(恐の坂)道」とも呼ばれ、古代の道のルートについてはいくつかの説があり<sup>16)</sup>、結論は得られていない。いずれにせよ大量の物資輸送に利用されるような幹線道路とは成り得なかっただろう。

この道が河内へ達したところに、奈良時代には「河内の大橋」が架けられていたと考えられている。河内の大橋に関しては、高橋虫麻呂が詠んだ歌に「～片足羽川のさ丹塗の大橋～」(『万葉集』巻九、1742)とあり、広い

景観と当時の華やかな風俗が描写されている。架設場所は大和川が石川と合流して河内に入る扇頂部に当たり、生駒山地の西裾を南北に通るのちの東高野街道と合流して西へ渡り、大津道と十字クロスしていたのであろう。

この橋を中井真考氏は「家原邑知識経」と呼ばれる大般若経の願文に出てくる橋であるとしている<sup>9)</sup>。この経文は、大県郡家原邑（現在の柏原市安堂町付近）の人々が僧侶の指導によって知識を組織して完成させた写経文で、この写経は橋の建設事業と一体となっていた。河内の化主と呼ばれた万福法師は天平11年(739)に橋の建設と写経の事業を企画したが、翌年に亡くなる。その遺志をついだ花影禪師が事業を遂行した。この架橋事業は、行基の事業と同時代のものであり、同様の意図をもって活動していた僧侶が他にもいたことになる。

聖武天皇と次の孝謙天皇の行幸の目的は、河内6寺に参詣することにもあった。天平12年(740)に、智識寺の盧舎那仏を礼拝した聖武天皇は、その地（大県郡）の人々が知識を成し、建立したという話にいたく感激し、大仏造営を願うようになったとされる<sup>17)</sup>（天平15年10月詔、天平勝宝元年(749)12月詔）。孝謙天皇は天平勝宝8年(756)2月、称徳天皇として天平神護元年(765)10月にも参詣しており、並々ならぬ帰依ぶりが伺える。

天平勝宝8年の難波への行幸の際、「洪河路」を通して帰途につき、智識寺の行宮に再度立ち寄ったのち平城京へ還幸したとされる。この「洪河路」を、『雄略紀』14年条にある「磯齒津路に通す、呉坂と名く」とある「磯齒津路」に結び付け、河内の中心部を横断して難波の大道へ向かう道路を想定する説も出されている<sup>10)</sup>。ただ、当時の大和川が人の手によって安定した河道が造られ、それによってどれほど安定した道が保ち得ていたかどうかなど、疑問が残る。

## 5. 行基の道と橋の変化と意義

### (1) 木津川の橋と泉大橋

天平12、13年ころから聖武天皇と行基の関係性が一段と強まったと考えられる。聖武天皇は国民の多くが知識として参加する大仏建立の理想を実現しようとするが、そのためには行基の協力が不可欠になっていた。一方、昆陽の地での理想郷の実現を試みた行基は、さらなる教団の発展を聖武天皇に託したのかもしれない。

恭仁京造営に関わって、『続日本紀』天平13年10月には鹿世山の東の河に橋を完成させたが、諸国の優婆塞らを集めて従事させ、橋完成後750人を得度させたとする。また翌年8月には宮城以南大路の西端と甕原宮以東を結ぶ大橋の架橋を命じたが、各国から銭を上納させて費用に充てた。これらはいずれも木津川に架けられた橋で、政府が主導して架けられたと考えられるが、その建設に行基が関与した可能性はある。

この時、泉大橋を含めると恭仁京に接する木津川には3橋が架けられていたことになるが、3橋が健全に併存していたかは不明である。そして聖武天皇が天平17年5月

に恭仁京へ行幸したときに渡った「恭仁京大橋」は、この3橋のいずれかを指すのであろう。

天平15年10月、紫香樂宮において盧舎那仏の造営が宣言され、行基は弟子を率いて広く協力を呼びかけた。そして行基は天平17年には大僧正の位に上り詰める。

紆余曲折の末、天平勝宝4年(752)4月に東大寺の盧舎那大仏が開眼供養の日を迎えたが、そこに行基の姿はなく、天平21年(749)2月菅原寺で入滅した。

恭仁宮は3年ほどで廃され、宮に直結する2橋も早期に廃れたのであろう。そして都が京に移ると泉大橋への政府の関与も少なくなり、維持管理は橋寺任せになっていたようで、橋の存続も難しくなっていた。『日本三代実録』貞観18年(876)3月の記事に、泉橋寺から申出があり、「泉河の渡口は寺の門前にあたるが、橋は洪水の度に流され、通行止めになる。当地の道俗が力を合わせて船を3艘買って寺家に寄託し、人馬の渡河に備えてきた。その後、太政官からの命令で山城国が浪人を配置して、寺家と船橋を守ったが、その後途絶えた」旨を訴え、再開を要望している。その後の記事は途絶えており、おそらく渡船に切り替えられたのであろう。

### (2) 山崎橋

長岡・平安遷都後は山崎橋の重要性は増した。長岡京へ遷都した延暦3年(784)7月、阿波・讃岐・伊予の3国から用材を献納させて橋が架けられた（『続日本紀』巻38）。そして『延喜式』巻50雑式には山崎橋と宇治橋のために特定の国から用材を毎年献納することが決められている。その後も流失と再建が繰り返されたが、中央政府が直接、維持管理に関わった記録が多く残されている<sup>13)</sup>。そして承平5年(935)2月に『土佐日記』の筆者が帰京したときに「山ざきのはしみゆ、うれしきことかぎりなし」と記した後の橋の消息は途切れる。

### (3) 長柄橋

平安期になると神崎川は三国川と呼ばれるようになり、中津川の分流点周辺に長柄の地名が定着していったようである。『続日本紀』延暦4年(785)正月14日条には「使を遣わして摂津国の神下、梓江、鯨生野を掘りて三国川に通ぜしむ」とあり、淀川と神崎川を連絡する水路が開削されたと考えられている。これは現在の摂津市別府を北上する水路が掘られたと推測されており、その目的は淀川の洪水を安威川、つまり神崎川へ分流するためとも考えられるが、水運ルートを神崎川に求めた可能性が高いとされている<sup>7)</sup>。

長柄橋に関しては、『日本後紀』弘仁3年(812)6月条に「遣使造攝津國長柄橋」という記事から、中央政府から専門の役人を派遣して架橋工事が行われた。しかし、その40年後にはすでに廃絶していた。『文徳天皇実録』仁寿3年(853)10月条に「攝津國奉言、長柄三國兩河、頃年橋梁斷絶、人馬不通、請准堀江川、置二隻船、以通濟渡、許之」とあることから、摂津国からの要請に応じて橋の再建をあきらめて、渡船を配置することを認めたことになる。

『文徳天皇実録』の記事からは長柄三國兩河を中津川

と神崎川に比定することは容易であろう。しかし、『日本後紀』の長柄橋はいくつかの候補地が考えられ、その位置を特定することは難しい。つまり、この長柄橋は京から難波へのルートを確保するために架けられたと考えるのが妥当であるが、中津川にのみ架橋しても道を確保することにならない。中津川分流点より上流の淀川本流に架けられたとも考えられるが、橋を渡ってから難波まで淀川左岸の道が整備されていることが前提となり、さらに旧大和川に橋が必要となる。可能性は低いかもしれないが、行基の時代に架けられたと推定した神崎川と中津川の橋を想定することも可能であろう。

時代が下るにつれて、行基が構想し、建設したと考えられる道・橋の名を目にすることは少なくなっていく。しかしその痕跡は所々に残り、それらが地域交通を支える重要な役割を果たしていることは貴重である。

### 註1 長柄の地名と人柱伝承について

長柄という地名は長良とも書き、元は長い地形を表し、川を指すことが多く、全国に30か所ほどであるとされている<sup>8)</sup>。大阪の長柄は、現在は淀川の大川(旧淀川)分流点あたりをいうが、古い時代はかなり広い範囲を指したようである。

孝徳紀大化元年12月に見える「難波長柄豊碕」宮は、現在では前期難波宮と同じ位置を示すとされ、長柄の地名は上町台地北端部も指したと考えられる。また、『住吉大社神代記』に記された「長柄船瀬」は「東限高瀬大庭、南限大江、西限鞆淵、北限川岸」とあり、上町台地北岸の河岸から現在の長柄より東側の淀川左岸地域をも指したと考えられる。さらにあまり歴史的な根拠とならないかも知れないが、長柄の人柱の伝承や長柄橋の橋柱で作られたとされる仏像などが現在の神崎川沿岸地域に残されており、長柄はかなり広い地域を指す地名として認識されていた傍証とすることはできるであろう。

現在、大阪に流布している「長柄の人柱」の伝承<sup>11)</sup>のうち、『芦分船』(延宝3年(1675)刊)のものがその原型となるものであろう。「むかし、撰津の国難波の岸と垂水の里はその間2里、数十の島があった。重要な往還であったが、橋は幾度も頽落した。安定した島橋を造るためには人柱が必要であるとして詔勅によって、垂水のほとりに関を造って、人柱を探すことになった。垂水の里に岩氏という人がいて、関を越えるとき戯れに、袴に継ぎのある人を人柱にすれば成功すると言った。役人が岩氏の着た袴に継ぎがあるのを見つけて直ちにとらえて人柱にした。おかげで島沿いの地は豊饒の地となった。勅宣により人柱を沈めた所に寺を建て、冥福を祈らせた。これが今の大願寺である。」これには後日談があり、「岩氏には娘があり、河内の禁野に嫁した。まったく物を言わないので、夫は母のもとへ帰すことにした。(中略)妻を垂水へ送る途中、雉鳥が鳴いたのを夫が射た。輿中の妻は大声で歌を詠んだ。

ものいわじ 父はながらの 橋ばしら

なかずば雉鳥も いられざらまし

夫は妻がものを言ったのを喜んで、家に引き返した。今その地を雉鳥縄手という。」

『撰陽群談第8 野の部』(元禄14年(1701)刊)では、娘の名前が光照前になっている。正徳2年(1712)に成立した『和漢三才図会』では、巻74撰津に大願寺、巻75河内に三本杉雉子塚を分けて紹介している。これらに続く、『撰津名所図会』や『河内名所図会』にも少し内容を変えながら、同様の話が採録されている。そして、現在、大願寺に隣接して「長柄人柱巖氏碑」(昭和11年建立)が建てられており、垂水町にも「雉嚙碑」(大正10年)があり、伝承を今に伝えている(写真-4、5)。

長柄の人柱の伝承はかなり古くから伝えられており、14世紀中頃には成立したとされる『神道集』の「橋姫明神ノ事」で長柄の人柱の話が取り上げられている。「長柄の橋は度々架けられたが成功しなかったので人柱を立てるべく内々の相談をしていた。ちょうど通りかかった妻子連れれの男が、架けても難しい橋には浅黄の袴に継ぎを当てた人を人柱に立てればいいと言った。妻が継ぎを当てていたことを知らなかった男は橋柱とされたが、ともに人柱とされることになった妻は悲しんで一首を詠み、橋柱に結び付け、幼子とともに川に身を投げた。この女がこの橋姫となった。人々は哀れんで橋の際に社を建て、橋姫明神として祀ったという。」

このような口碑の類は歴史学の分野ではほとんど無視されているが、民俗学の分野では重要なテーマで、様々な角度から考察が加えられており<sup>15)</sup>、あえて参考にした。



写真-4 長柄人柱巖氏碑  
(大阪市東淀川区東三国一丁目)



写真-5 雉嚙碑  
(吹田市垂水町)

### 〈参考文献〉

- 1) 国書刊行会編『行基年譜』『続々群書類従第三 史伝部二』1970
- 2) 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985
- 3) 市原実他「大阪平野の発達史」『URBAN KUBOTA No. 16』1978
- 4) 井上薫『行基』吉川弘文館 2000
- 5) 大阪歴史博物館『大阪上町台地の総合研究』2014
- 6) 尾田栄章『行基と長屋王の時代』現代企画室 2017
- 7) 滝川政次郎『江口・神崎』至文堂 1965
- 8) 田中清「長柄橋」『土木学会誌 46-1』1961
- 9) 中井真孝『日本古代の仏教と民衆』評論社 1973
- 10) 中村太一「道と駅伝制」『列島の古代史 4』岩波書店 2002
- 11) 牧村史陽『大阪の伝説 3 長柄の人柱』史陽選集刊行会 1968
- 12) 松村博『大阪の橋』松籟社 1987
- 13) 松村博『京の橋物語』松籟社 1994
- 14) 松村博「渡河施設」『日本古代の交通・交流・情報 3』吉川弘文館 2016
- 15) 宮田登「献身のフォルク」『怪異の民俗学 7 異人・生贄』河出書房新社 2001
- 16) 山本博『竜田越』学生社 1970
- 17) 吉川真司 2018『聖武天皇と仏都平城京』講談社
- 18) 和田萃「行基の道略考」『環境文化 No. 58』環境文化研究所 1983

(2020.4.20 受付)